

子どもの心を豊かにする絵本の世界 ～やってみよう！読み聞かせ～

講師

賀集 弥須子、北島 愛喜

こどもみらい館子育て図書館司書

1. はじめに（子育て図書館の紹介）

皆さんこんにちは、子育て図書館の賀集と申します。私は普段、3階にある図書館におります。子育て図書館は、乳幼児向けの絵本や育児書、保育の専門書など揃えた子育て支援のための専門図書館です。所蔵数は、約2万8千点。そのうち7割を占めるのが、絵本です。絵本のたくさんある図書館ということになります。

子育て図書館では、毎日「おはなし会」を実施しており、ボランティアスタッフによる絵本や紙芝居の読み聞かせを、約20分間行っています。そのボランティアスタッフの方の研修も、私たち図書館司書が担っております。他には、「お楽しみ会」や「赤ちゃん絵本のふれあい会」などのイベントを毎月実施しております。私たち自身が、読み聞かせを行う機会も多いです。

この後の講義では、普段から多くの絵本に接している私たちから、絵本が子どもたちにとっていかに大切なものか、いかに魅力あふれたものかということと、絵本の読み聞かせの方法やコツなどについてお伝えしたいと思います。今日の研修をきっかけに、皆さんの園（所）で絵本を使った楽しい時間がより一層広がっていけばいいな、と思っております。

本日の研修は、実際に読み聞かせをしていただいたり、グループ交流を行っていただく実践型の研修会となっています。その前に、「絵本の魅力について」「やってみよう！読み聞かせ」という2つのテーマで、お話しさせていただきます。どうぞ、よろしく願いいたします。

2. 「絵本の魅力について」

子どもたちにとっての絵本の魅力はたくさんありますが、大きく4つの事についてお話したいと思います。

① 実体験では味わえない世界を体験できる

例えば、愛情を伝える手段として、絵本を使わなくても、スキンシップや手をつなぐこと等で十分ではないか、また、絵本を読まなくても、実体験だけでも充分ではないか、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、もちろん、遊びなどの実体験も、とても大事だと思いますが、実際に体験できることには、限界があります。でも、絵本は、子どもたちに実体験では味わうことのできない体験を与えてくれます。

幼い子どもにとっては、現実と物語は、はっきりと区別されていません。現実の世界とお話の世界を、行ったり来たりして楽しむことができますので、お話を聞いている間、子どもは、主人公と同化して、まるで自分自身のことのように体験しています。例えば、『かいじゅうたちのいるところ』では、主人公のマックスと同じように、自分もかいじゅうのいる島に行って冒険をします。『はじめてのおつかい』では、自分もみいちゃんになって、いろんなことを乗り越えながらおつかいに行くのです。実際に体験することはできないけれど、絵本の中ではそれが叶います。

実体験も絵本の世界と自分を重ねる体験も、どちらも体験させてあげることで、子どもの世界が大きく広がります。

② 豊かな感情を育む

実生活でも、友だちとの関わりなどから心が動いたり、感情が育まれる体験はたくさんできると

と思いますが、絵本の中での体験と合わさることで、より多くの感情を育てていくことができます。先ほどの話ともつながりますが、絵本でしか味わえない経験によって、喜びとか悲しみ以外にも、大きな達成感を味わったり、自分に自信がついたり、（切ないな…）（やるせないな…）といった様々な感情も味わうことができます。

そして、絵本の読み聞かせには、読み手である大人が必要です。ハラハラドキドキする時も、（ちょっと、心細いな…）という時も、読んでくれる人と一緒にいるという安心感の中で、大人と子どもと一緒に体験し、共有して、読み手から伝わる感情も一緒に味わうことができます。そのような経験を重ねることで、子どもは感情を豊かに育んでいくことができます。

③ 読み手の愛情が伝わる

子どもにとって、絵本は、誰かに読んでもらうものです。読み手の愛情が伝わることで、子どもは読み手を信頼して、安心感を持ってお話を聞くことができます。（自分は大切にされているんだな）（愛されているんだな）と実感できることは、子どもたちの自己肯定感を育てることにもつながりますし、それは、生きていく上で大切な心の安定にもつながっていきます。

保育の現場での読み聞かせでも、先生の愛情が子どもたちに伝わることで、安心できて、（自分の居場所はここなんだな）と思えて、その子らしく園（所）生活を送れることにつながっていくと思います。

④ 仲間とのつながり

これは特に、集団での読み聞かせができる就学前施設の強みだと思いますが、友だちと一緒に絵本を楽しむことができ、子ども同士で同じ体験をすることができます。そのことによって、一人ではできないいろいろな発見が生まれたり、感情の共有、連帯感や心のつながりが生まれます。

友だちの反応、例えば、すごく笑っている友だちがいたら（これは面白いことなんだな）、逆に悲しそうにしていたら（これは悲しいことなんだ）、というように（自分の考えとは違うな）（いろんな感じ取り方があるんだな）ということ、

友だちと一緒にいることで、知ることができます。それは、先ほどの「豊かな感情を育む」ということにもつながっていると思います。

時には、絵本の中の印象的な言葉や場面を、友だちと遊びの中で再現したり、追体験したりすることで、それがまた、共通の体験となっていくます。絵本は仲間との絆も育んでくれます。

まとめとして、絵本は形あるものですが、絵本を読んでもらうことで、子どもの世界が広がったり、いろいろな感情を味わったり、愛情が伝わったり、目には見えない大切なものを育んでくれます。また、絵本を使って真似をして遊んだり、絵本に書かれている物を食べる真似をしたり、物を何かに見立てたりできるようになると、やがて現実には存在しないものにも心を動かせる能力（想像力）が育っていきます。本をたくさん読んであげること、想像力が育っていくのです。

このように、心の根っこを育てる乳幼児期に、絵本を読んであげることが、とても大切なことです。現場でも、ぜひ、たくさん読んでいただければと思います。

3. 絵本の選書のコツ

① なんととっても楽しいものを！

子どもたちには、絵本を好きになってもらいたい、と思いますので、絵本を選ぶときは、「役に立つから」とか「ためになるから」というのではなく、純粋に「絵本は楽しいもの」、「喜びを共有できるもの」という視点を持って選んでほしいと思います。今は、メッセージ性の強い絵本がたくさん出版されていて、保育の中で使う場面もあると思いますが、基本的に絵本は、何かを教えるために使うものだとは思っていません。純粋にお話の世界を楽しむためにあるのではないかと思います。皆さんも、絵本で子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごしたい、子どもたちに楽しんでもらいたいという気持ちで、選んでいただくと良いと思います。

② ロングセラーは有力な候補

何を選ぶかと迷ったときのお勧めは、ロングセラーの作品です。子どもは、心から楽しんだ絵

本は、「もう一回、もう一回」と、繰り返し読んでほしがります。そうやって、子どもたちに支持されてきた作品が、長く読み継がれて、ロングセラーと言えるものになっていると思います。『ぐりとぐら』とか『はらぺこあおむし』など、ロングセラーの作品は、ぜひ読んであげてほしいと思います。

何十年も前に出版されている絵本の中には、(ちょっと地味だな)と思うようなものもあるかもしれませんが、時を経ても残り続ける絵本というのは、それだけの理由があります。選び抜かれた言葉や、想像力を掻き立てる絵で、言葉と絵の一体感も素晴らしく、子どもたちの心に深く残り続ける魅力がたくさんあります。一度手に取って、声に出して読んでみてください。それでも(ちょっと違うな)と思うものは、無理には読まなくてよいと思います。ロングセラーの本をたくさん読むと、良い本の基準が、自分の中でできてくると思いますので、そういう基準をまず作っていただくから、いろいろな本を読み比べていくと、だんだん違いが分かってきます。まず、基本はロングセラーの本をたくさん読んで、長く読み継がれている理由や魅力を、感じていただきたいと思います。

③ 子どもが物語に入り込みやすいものを！

先ほどもお伝えした通り、子どもは、現実の世界とお話の世界を行ったり来たりして楽しむことができますので、お話も、日常生活の中から繰り上げられる身近なファンタジーとか、乗り物や動物など、主人公に同化して楽しめるものが、スッとお話の世界に入っていくやすいと思います。そういう本を読むと、絵本の楽しみを知ることができるので、絵本を親しむきっかけになると思います。

例として、わかりやすいように有名な絵本をあげさせてもらいますが、この条件が当てはまれば、どの本でもいいと思います。参考になさってください。『おふろだいすき』は、毎日入るお風呂の中で、不思議な楽しいことが次々と起こります。『てぶくろ』は、実際にはありえないのですが、小さい手袋の中で繰り上げられる動物たちとの

やり取りや展開が、子どもたちの心を掴みます。『おべんとうバス』も身近な食べ物とか乗り物が出てきますので、子どもたちは大好きで、図書館でも人気です。

4. 子どもの好きな絵本の特徴

子どもたちが好きな絵本には、いくつか特徴がありますので、簡単にご紹介していきます。

① くりかえし(言葉、場面)

子どもは、言葉も場面もくりかえしが大好きです。『おおきなかぶ』の「うんとこしょ、どっこいしょ」の言葉のくりかえしは、参加型にしてみんなで一緒に読むと、とても楽しいですよ。『ぞうくんのさんぼ』は、動物たちが次々にぞうくんの背中に乗ってさんぼするという場面がくりかえされます。オチもあり楽しいです。

他にも、繰り返しの絵本は数多くあります。このようにくりかえしは、子どもにとって楽しめる要素の一つです。

② ハッピーエンド

ハッピーエンドというのは「めでたしめでたし」だけではなく、「おいしかったね」とか「ただいま」とか「おやすみ」というように、子どもが幸せな気持ちになることを、ハッピーエンドと捉えていただけたらと思います。大人もそうですが、子どもも幸せな気持ちで終わられるお話というのがとても好きです。一度に複数の絵本を読む場合は、ハッピーエンドの本は一番最後に読むと良いと思います。

『ぐるんぱのようちえん』は、失敗を繰り返してしょんぼりしながらも、最後は、自分の居場所を見つけるというお話です。『しろくまちゃんのほっとけーき』は、ホットケーキを作る過程も楽しいのですが、出来上がったものをおいしく食べて「あ〜おいしかった」と、片付けもしておしまい、というお話で、子どもに満足感を与えてくれます。「ごちそうさまでした」で終わる絵本は、たくさんあります。

③ 行って〜帰る(安心の場所に戻る)

主人公が、遊んだり、冒険したりして、また帰ってくる、または、現実の世界から空想の世界へ

行って、大好きな人のいる現実の世界へまた戻ってくると、いうようなお話です。『かいじゅうたちのいるところ』や『めっきらもっきらどおんどん』、『はじめてのおつかい』、『どろんこハリー』などが、この特徴を持っている絵本です。

④ できないことを代わりにやってくれる

例えば、『おさるのジョージ』では、ジョージが毎回とんでもないいたずらをします。普段「ダメよ」と言われていることを、絵本の中でジョージが代わりにやってくれるので、子どもたちにとっては、発散できて、すがすがしく感じられるのかなと思います。『ぼくのくれよん』は、なぐり書きなどが楽しくて仕方のない子どもたちには、すごく魅力的な絵本だと思います。（こんな大きなゾウのくれよんで、ビュービューお絵描きしてみたいな）と思わせてくれる作品です。『どろんこハリー』も、犬のハリーが家出をして、泥だらけになったり、煤だらけになったり、と子どもたちのやってみたいことを叶えてくれているお話です。

⑤ 小さなものが大きなものをやっつける

これは、勇気を与えてくれる子どもたちの好きな絵本の要素の1つです。『三びきのやぎのがらがらどん』では、ヤギがトロールに打ち勝ちます。怖いものがあっても、それを切り開いていくことができるんだ、と子どもは勇気を得られます。『ラチとらいおん』も、ライオンがいてくれることで、男の子が自分より大きくて怖い子に立ち向かえるお話で、子どもの背中を押してくれる作品だと思います。

⑥ おいしいもの

『あっちゃんあがつく』や『くだもの』、『おまかせコックさん』など、おいしいものの絵本はたくさんあります。子どもたちは、おいしいものが出てくるお話が大好きです。図書館でも、よくおいしいものの絵本を探すお手伝いをしますし、読み聞かせで読んだら、子どもたちは「あ〜おいしかった」「おなかいっぱい」とか言って、楽しんでくれています。

5. 読んであげてほしいもの

① 小さな子どもにこそ本物の絵本を！

小さい子どもは、まだ、ストーリー性というのはわからないので、最初に「もの」に出会います。『くだものころん』のように、つつい手を伸ばして、食べてみたくなるようなみずみずしさを感じられるような絵本を見せてあげると、「これは、間違いなく桃だ！」とはっきりわかります。年齢が低ければ低いほど、幼ければ幼いほど、美しくて本物らしい絵本に出会わせてあげてほしいと思います。

オーバーヘッドカメラを使って、実際の絵本を見ながらの講義。

例えば『おにぎり』の絵本ですが、この絵本に出てくるおにぎりを見ると、おにぎりがどんなものか、形とか海苔の質感まで伝わってきます。どうやって作られるのかまでよくわかる、すごく良い絵本です。本当においしいそうですね。このような絵本に出会い、「おにぎりはこれだ！」とわかると、やがて、そうではないものに出会ったときに「あれれ…」と面白がったりできるようになります。

これは、『そよそよとかぜがふいている』という絵本です。“こーんなに手が大きいネコ”が出てきて、出会った動物たちの顔をギューギューはさんで、おにぎりにしてしまいます。タヌキのおにぎり、ライオンのおにぎり、ゾウのおにぎり…。いろいろな動物の顔をおにぎりにして、みんな集まってお弁当になるという場面もあります。おにぎりはどういうものかとか、お弁当箱に入れることもあるんだということがわかっていた方が、面白がれますので、最初は、「もの」をしっかり理解できるような絵本に出会わせてあげたら良いかなと思います。

② 科学絵本を取り入れる

科学絵本というのは、ノンフィクションの絵本になります。物語ではなく、動物や植物など身近な「もの」や「こと」を描いています。

科学絵本は、実際のものと同じくあわせて使うと良いと思います。実際に、見たり触ったりと五感

を働かせた経験が、絵本とつながっていったり、また、その逆があったりして、実際の世界と絵本の世界を往復することで、その子の世界が大きく広がります。本で知ったことと、実際の体験が噛み合っていくという面白さというのは、子どもにとってとても新鮮な経験になると思います。素晴らしい科学絵本が、たくさん出ていますので、ぜひ保育で使っていただきたいと思います。

最近出た本に、図鑑や科学絵本を活用した保育現場での実践を紹介した『ずかん・かがく絵本から広がる遊びの世界』という本もあります。参考にさせていただきます。

簡単ではありますが、私の話は、このあたりにさせていただきたいと思います。絵本の魅力を感じるには、実際の絵本に触れていただくのが一番だと思います。次は、実際の絵本を読んでいただく前の「やってみよう！読み聞かせ」の講義に移りたいと思います。ありがとうございました。

6. 「やってみよう！読み聞かせ」

子育て図書館司書の北島と申します。よろしくお願ひします。私からは、実際に子どもたちに本を読むときの読み方や注意点を伝えます。

京都市図書館で作成した「おはなし会」をするときの注意点を書いた資料を基にお話ししていきます。これからお話しするのは、1対1の読み聞かせではなく、複数人に向けてする「おはなし会」を想定しています。対象年齢も、赤ちゃんではなく、お話しというものがどういうものかわかる3歳以上くらいの年齢を想定しています。

(1) 本の選び方について

“お話し会”に向く絵本の条件

① ある程度の大きさがあること

会場の大きさや人数を考えて、本を選びましょう。皆さんおわかりかと思いますが、大きい会場なら大きい絵本の方が後ろまで見えやすいですし、2～3人の場合は、そんなに大きな本でなくても、良く見えます。絵本にはさまざまな大きさや形のものがあります。後ろの子まで見えるかな、と考えると選んでください。

② 絵がよく見えること

遠目がきき、子どもがどこに座っていても、よく見える絵であることが、ポイントです。色合いが薄いか、線が細いといったものは、たとえサイズが大きくても、後ろの方で見る子には何が描かれているかわからなかったりしますので、注意が必要です。また、絵が細かく描き込まれている場合も、遠いところに座っている子どもには、わかりにくいと思います。このような絵本は、近くで見ると楽しむ本だと思いますので、人数の多い「おはなし会」には向いていないと思います。

線が太く、絵も大きいものは、後ろの子も絵が見やすく、たくさんの子どもが見る読み聞かせに適していると思います。

③ ひとつの絵に対して文の量が多過ぎないこと

例えば、一つの挿絵に対して、たくさんの展開が文章で書かれていると、内容がわかりにくくなるので、複数人の読み聞かせにはふさわしくないと考えます。特に、幼い子どもの場合、話についていく子どもの心の動きと、場面の変化のペースが合うことが、望ましいと言えます。

④ できるだけ、物語の進展に沿った場面割であること

物語の展開上重要でないことが、何場面にもわたって描かれていたり、重要なことが一場面にいくつも押し込まれていたりすると、ちぐはぐな印象を受けます。「おはなし会」ではあまり選ばないかもしれませんが、漫画のコマ割りのように、1ページにいくつもの挿絵が描いてあると、たくさんの情報が描き込まれすぎて見にくいので、1対1でお膝の上で読むような場合に読んでもらう方がふさわしいと思います。

⑤ 原則として、見開きに一場面であること

見開きに1場面の絵本の方が、読み手・聞き手とも、お話を楽に進められますが、もし見開きに二場面以上絵がある場合は、読みながらその場面を軽く指で指すとわかりやすくなります。例えば、『ぼちぼちいこか』では、見開きに2場面描かれています。子どもの年齢・発達や経験によって、2匹のカバがいると思ってしまうこともあり得るので、読みながらその場面を指さすとわかりや

すいと思います。

(2) 子どもたちの前での読み方について “絵本の持ち方・読み方”の留意点

① 安定した持ち方で持つ

なるべく本がぐらつかないようにします。ぐらつくると子どもの集中力の妨げになります。本の中心を、下からしっかり持つのが、基本的な持ち方になります。ページをめくる時に、腕で絵を隠さないように、また、本が上向きになったり、自分の顔や体などで、絵を隠さないように注意しましょう。常に子どもの視線を意識して、見にくくなっていないか、と気を付けて読んであげてください。

新しい本を読む場合は、開き癖をつけておくと、めくりやすくなります。

② お話の流れを考え、読む速度・めくる速度を考える

文のない場面でも、絵をひとわり見てもらうゆとりを持ちましょう。例えば『かいじゅうたちのいるところ』で、マックスがかいじゅうたちと遊ぶ場面は、3ページにわたって文がありません。子どもたちは文ではなく絵を見ています。文がないからといって、サッサとめくってしまうのではなく、絵を見て楽しめる間をゆったりと取ってあげてください。

③ ページをめくったら一呼吸おいて文を読む

子どもは、まず絵に集中するので、ページをめくったとき、すぐに読み始めるのではなく、少し間を置いて、子どもたちが絵を見る時間を取ります。すぐに読み始めると、子どもが絵に集中できなくなります。子どもが“絵を読む”間を取りましょう。読み始めと次のページに行く前に一呼吸おいてあげると、絵をたっぷり見る時間を取ってあげられます。

しかし、場面によっては、めくってすぐ読むという演出を入れた方が、臨場感が出ておもしろい場合もあります。どんなふうに読んだらより楽しめるかと考えて、事前に下読みをすることをお勧めします。

④ 絵と文を調整する

あまりないのですが、場面割の関係で絵と文が合っていない場合、特に絵が先にきて話が割れている場合には、調整が必要です。めくる前に、次のページの文章を読み、絵と文を合わせると、聞いている子どもたちにわかりやすく、ワクワクした気持ちなどもより膨らむと思います。

⑤ 素直に飾り気なく、心を込めて読む

最後に、読み手は素直に飾り気なく、心を込めて読みましょう。

読み聞かせの際の読み方や注意点は以上になります。持ち方は安定した持ち方の方が、子どもたちが見やすいと思いますが、それ以外の留意点は、全てに気を付けて読むことは難しいと思いますし、全部の項目を絶対に守ってくださいというものでもありません。こういうことに気を付けた方が、より子どもたちが絵本を見やすかったり、絵本の世界を楽しめたりするということを知っておいてほしいと思いますので、参考にしてください。

続きまして、読み聞かせについてのよくある質問から、お伝えしたいと思います。

●表紙や裏表紙も見せた方が良いのか？

表紙から裏表紙まで、すべてのページをゆっくり見せましょう。見返し(表紙の裏)も絵本の世界に入っていく大切な間になります。絵が描かれている場合もありますが、描かれていなくてもしっかり間をとって、子どもが絵本の世界へ入って行きやすくしてあげてください。また、見返しに絵が描かれていても、特に言及する必要はありません。

裏表紙には物語のその後や、作者の思いが描かれていることもあるのでしっかり見せます。例えば『はじめてのおつかい』では、裏表紙に、主人公のみいちゃんが買ってきた牛乳を、赤ちゃんと一緒に飲んでいる絵があります。本編の中で転んで擦りむいた膝にも、ちゃんと絆創膏が貼られているんです。

表紙と裏表紙の絵がつながっている場合は、読

んだ後に表紙と裏用紙を広げて見せます。例えば『おおきなかぶ』は裏表紙が大きなかぶの葉っぱで、表紙とつながってます。実は、表紙が一番最後のページの続き（みんなで抜いた大きなかぶを運んでいる場面）になっていますので、表紙と裏表紙を開いて、最後に絵をつなげて見せてあげてください。

作者の意図や気持ちが絵本の隅々にまで描かれていますので、全てのページを丁寧に見せてあげてください。

●声色を使ってもいいか？演技をして読んでもいいか？

大きさ過ぎたり、キャラクターによって声を変えたりなど演出しすぎると、子どもが読み手の演技や表情が気になって絵本に集中できなくなるため、読み聞かせのボランティアさん等には、声色など使わず淡々と読んでほしいと伝えています。また、読み手が登場人物の感情などを決めつけて演技して読むことで、子どもたちが登場人物の心情や、絵本の世界観のイメージを膨らませる機会を奪ってしまうことにもなります。

ただし、読み手のキャラクターに合った絵本を読み、キャラクターに合った演出をすることで、絵本の楽しさが倍増するという経験をしたこともあります。皆さんは聞き手の子どもたちと関係性ができているので、それぞれ先生のキャラクターにあった演出をすることで、絵本の良さを引き出すことになるかもしれません。

●作者、出版社の名前は言ったほうがいい？

私たち司書は、絵本に関わった人のお名前を言いたいし、言ってほしいと思っていますが、絶対ではないです。お話を考える人、絵を描く人、絵本を作って出版する会社があって、絵本は作られるということを伝えたいと思っています。また、子どもが好きな作者を覚えると、自分で新しい絵本を選ぶきっかけにもなります。

●難しい言葉は言い換えた方がいい？

難しい言葉や方言を言い換えて読んだりせず、絵本に書かれている言葉を大事に読みましょう。そのまま読むことで、元々の言葉や文章のリズムを大切にします。知らない言葉に出会い、子

どもたちの語彙を増やすことにも役立ちます。どうしても意味が通じない言葉は、『〇〇のことだよ』と補足してください。

●途中で読むのをやめてもいい？

一度開いた絵本は、余程のことがない限り最後のページまで読みましょう。途中で絵本を閉じると、絵本の世界に入り込んでいる子どもたちの気持ちが置き去りになってしまいます。聞いていないように見える子ども、耳ではお話を聞いている場合があります。また、絵本を最後まで読み切ることで、現実世界との区別がつくこととなります。

●読み終わってから感想を聞いてもいい？

絵本を閉じた後、子どもたちの心の中は様々な変化が起こっています。それをすぐに言葉にするのは難しいのです。感想をすぐに言葉にできない子どももいます。その場合、周りの子の感想に合わせて、自分の感想を変えてしまうこともあり得ます。特に、大人からの決めつけた感想を押し付けないように気を付けましょう。

7. グループ討議

それでは、グループで実際に読み聞かせをやってみましょう。

1グループ4名で、司書さんが準備した絵本（2冊のうち1冊）の読み聞かせをする。声の大きさ、読むスピード、聞き取りやすさ、本の持ち方などをポイントに、良かったところや、こうしたらもっと良くなるのではというところをアドバイスし合う。1人5分程度。

引き続き、グループで読み聞かせ実践についての実態や困りごと、また絵本の大切さについて交流していただけたらと思います。こんなことに困っているという悩み等があれば、それぞれの経験をお話したり、お持ちの知識等からアドバイスしたりしていただくと、より今後活かせる学びになると思いますので、よろしく願いいたします。

グループ交流

- ・ 保育場面での絵本のエピソード
- ・ 読み聞かせなど絵本に対する悩み

8. 最後に

皆さん、とても上手に読み聞かせをされていて、普段こんな風に子どもたちへ読み聞かせをされているんだなあという情景が、目に浮かびました。就学前施設というのは、一番絵本が活用できる所だ、と思います。図書館の読み聞かせでは、子どもたちとは一期一会のことが多いのですが、皆さんは子どもたちと繰り返し絵本を楽しむことができるので、とてもうらやましく思います。これからも、たくさん絵本を読んで、子どもたちと心の交流をしていただけたらと思います。

また、3階の子育て図書館には、絵本がたくさんあります。大型絵本もたくさんありますので、ぜひお越しください。私たち司書は、たくさんのお絵本を取り扱っていて、子どもたちに人気の絵本、季節やイベントに合わせて読む本など、様々な情報もありますので、絵本選びに困った時には、声をかけていただけたらと思います。

本日は、ありがとうございました。

令和6年度第6回共同機構研修会

令和6年9月12日

於：京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

《参考図書》

- ・『『保育と絵本』 瀧薫 著 エイデル研究所』
- ・『『子どもを育てる0・1・2歳児にぴったりの絵本』 児玉ひろ美 著 小学館』
- ・『『保育をゆたかに絵本でコミュニケーション』 村中李衣 著 鴨川出版』
- ・『『0～5歳 子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド』 児玉ひろ美 著 小学館』
- ・『『紙芝居入門1 紙芝居演じ方のコツと基礎理論のテキスト』 子どもの文化研究所 一声社』